

平成29年度第5回沼田市市民構想会議（会議概要）

- 1 日 時 平成29年11月14日（火）午後2時から午後4時
- 2 場 所 沼田市役所 第二会議室
- 3 出席委員 委員11名（欠席14名）
アドバイザー 篠田 暢之氏
沼田市 副市長、市民部長、健康福祉部長、財政課長
（事務局：企画課長、企画係長、企画課主査、企画課主事）
- 4 会議内容
 - (1) 開 会
 - (2) 会長あいさつ
 - (3) 前回の会議結果について
 - (4) 議題
 - 1) 『沼田市公共施設等総合管理計画』の推進に係る意見（案）について
 - 2) 沼田市まち・ひと・しごと創生総合戦略の効果検証について
 - 3) その他
 - (5) 閉 会

***** <略> *****

2) 沼田市まち・ひと・しごと創生総合戦略の効果検証について

<会 長>

次第の「(2) 沼田市まち・ひと・しごと創生総合戦略の効果検証について」を前回に引き続き議題とさせていただく。今回は20頁の目標2「新しい人の流れをつくる」から始めさせていただくので、皆さまからのご意見をお願いしたい。

<委 員>

23頁のKPI「観光売り上げ：10%増」について、平成26年度の売上げに対して、平成27年度の売上げが既に約8%上がっている状況で、5年後の31年度までに10%を増加させるという目標値の設定は甘過ぎると感じるがどうか。

また、24頁の「地域「食」商品取扱店・加盟店の増加：100%増」について、平成26年度からの加盟店数は横這いの状況であり、店舗数を見る限りにおいては、加盟店を増やすことにおいて売り上げが増加しているわけではないので、もっと他の施策を考えないと、売り上げ、経済効果としてはどうなのかということ望めないという気がするのでKPIの見直しをしてはどうか。

<事務局>

まず、ひとつ目の「観光売り上げ：10%増」につきましては、5年間で10%増という目標を掲げていながら、翌年度には売上げを約8%伸ばしており、目標設定としては甘いのではというご指摘であると思いますが、平成27年度、平成28年度は、大河ドラマ「真田丸」の放映により、ほぼ確実に観光売上げが伸びることが分かっていたのですが、それでは放送終了後の平成31年度まで売上げ10%を維持できるのかという不透明なところがありましたので、このような目標値の設定になっているものと思われます。

ふたつ目の「地域「食」商品取扱店・加盟店の増加：100%増」を見直すべきかについては事務局では判断しかねますが、この総合戦略については見直すことを前提に推進会議において効果検証を行うこととされているものでございますので、この市民構想会議でいただいたご意見を所管課へ伝えさせていただき、所管課において検討した上で、必要があれば改訂を行っていくという流れになりますのでよろしくご理解をお願いいたします。

<委員>

もしも見直すならば、23頁に「研修会参加者：100人」のKPIがあるが、3年間の参加者が0人となっている。研修会に参加させる（する）ということに意味があることなのかということも検討された方が良いと思う。

もう力を入れないのであればやる必要もないであろうし、無駄なエネルギーを使わずに、ポイントを押さえて、どうしたら経済効果が上がるのか徹底的に検証していかないと、税金の無駄遣いになってしまうと思う。

<委員>

先ほどの「研修会参加者：100人」について、この研修がアクションプログラムにあるコーディネーター育成研修、ガイド育成研修であるならば、研修会は必要であると考え。やはり、市外から来訪した人に適切なガイドをするということは必要であるので、この研修会の実績が上がらないのだとしたら、どうしたら研修の参加者を募れるのかを工夫していく必要があると思う。

<委員>

このKPIの数値を市の担当職員が把握していない可能性もあるのではないかと。実際に街なかでは研修会を実施していて、県からの補助金を使って真田丸、沼田の歴史に関しての研修を年数回実施しているが、その数値がここに入っていない。

また、観光売り上げに関しては、細かい数値がこのKPIに含まれていないように思われるので、外部への説明にあたっては更に詳細な資料を示していく必要があると考える。

<委員>

研修会については、市内には地理・歴史に詳しい方が多数いらっしゃるので、然るべき方を講師としてお迎えして研修会が実施されれば、大きな効果が得られると思う。

<委員>

前回、前々回の会議で、アドバイザーの篠田先生から沼田市が観光というものに対してどういう考えを持っているのか明確な議論がなされていないとお話があったが、例えば「天空の城下町 “真田の里” 沼田」として、これから沼田市をPRしていくのであれば、それに見合ったものを観光で展開していくという議論をこの会議で行うべきだと考えている。

現在のところ何を目標にしてやっていくのか漠然としていてよく分からないが、真田丸の効果が上がったから、現在は皆さんも真田丸と言っているが、沼田市として本当は何を売りたいのか、何をしたら人が来るのか、どうしたら儲かるのかといった議論をしっかり重ねてから、それに見合った人材育成や事業を行っていくべきであると考えている。

<委員>

川場村では田園プラザがあったから、その周囲に色々なものができ始めているので、観光については手広く取り組むよりも、力を一点に集中し注いでいく方が、より効果が上がっていくものと思われる。

<委員>

21頁のアクションプログラムにある公衆無線LAN整備検討について、公衆無線LANが整備されていることで、外国人観光客が来市した際に撮影した写真などが全世界に発信されることも期待できるので、現在の整備状況や今後の整備計画についてお聞かせいただきたい。

<事務局>

所管課に確認し、次回の会議で説明させていただきたいと思いますのでよろしくお願い致します。

<委員>

26頁のインバウンド推進のアクションプログラム「Wi-Fi環境の整備」に関連して、沼田市ではどのような国に情報発信しているのかお聞かせいただきたい。

<委員>

Wi-Fi環境の整備に関しては、市の整備と併せて民間への働きかけも必要で

あると考える。

<事務局>

インバウンドの推進に関して、沼田市としては今後、主に台湾、タイ、ドイツを中心にインバウンドの促進を進めてまいりたいと考えているところでございます。

<委員>

ドイツは東京オリンピックまでの一時的な話ではないのか。

<事務局>

フュッセン市とは20年にわたって姉妹都市交流を行っていますので、これからも交流を続けてまいります。

<アドバイザー>

三重県伊賀市は忍者の里として有名ですが、現在、この伊賀市に様々な情報ソースを手掛かりに、沢山の外国人が集まってくるそうです。インバウンド効果の一例ですが、こうした現実から三重県では三重大学との連携で、三重大学では来年から大学院に忍者学科が設けられることになったそうです。『忍者になりたい、忍者のことをもっと深く知りたい』という諸外国の人たちが携帯の端末情報やWi-Fiを通じて、観光客をはじめ大学の学生集めにも貢献しているそうです。そうした事がこの学科を目指す学生が大部分は海外からの留学生になる勢いだそうです。

情報収集は外交にとって極めて重要な側面があり、忍者をコンセプトに将来はそうした忍者の知恵を活用して、外交に必要な情報収集の専門家を育成する構想まで描かれているそうです。

従来の大学のシステムや、文部法規から考えてみても、忍者学科の設置そのものが驚きですが、従来の見方や・やり方にとらわれない扱いを地域の資産として活用していく姿勢には、時代の風を感じます。

とりわけ学生の大部分が海外からの留学組となる模様で、この学科を入口として日本文化へと導いていく様々な内容に踏み込んでいくことには日本の国際化の為にも深い意味があるように思います。古事記や日本書紀の世界につながる問題群のひとつの伊勢神宮が身近にあり、日本の歴史をも視野に教育を進めるとのことです。

三重大学の大学院に忍者学科が創られることも驚きですが、普通、忍者というと私たちには子どもの頃の遊びの延長にあるような感覚でしたけれども、それを日本文化につなげていくような強（したた）かな計算が裏にあって、これは見習うべきところではないかと思い、関係者と話をしたことがあります。

<委員>

伊賀市だから忍者ということなのだと思うが、真田十勇士にこじつけて伊賀市よりも先に沼田市で忍者学校を創って海外に発信していたら、海外から沢山の学生が

来て成功していたかもしれない。沼田の人にはそういうことが思いつけなかった。そうした発想というものは内からは、なかなか出てこないように思う。

先ほどお話に出ていた田園プラザの大成功の原因は、自分たちで売りたいものを売るのではなくて、外から見て、特に世田谷区と交流されていることから、都会から来て、お金を払う人が、買いたいと思うものを売ることで成功につながったと思います。

つまりは自分たちが売りたいとか、良いと思っているものでビジネスを考えていたのではなく、消費者が欲しいものを売る自覚とそれを徹底する経営姿勢があったからだと考えている。

Wi-Fiもそうだが、沼田市が呼びたいという人が誰かを考え、そうした点をもう少し研究し、情報収集した方が観光の振興には有効ではないかと考えている。

先日、アレックス・カー氏の講演を拝聴したが、カー氏が宿泊施設に改装した四国の山奥の古民家は、国内外から予約が入り、連日満員だとのことである。おそらく見慣れた風景としか感じない私たち日本人にはそうした発想はなかなか思い浮かばないのだと思う。外国人から見ると山奥の古民家が美しいと気付くことができるということなのだと思う。

つまり地元ではそれが観光資源になるとは思っていなくても、外部の人から見るとそれが素晴らしい観光資源になると映つるように、地元目線ではなく外からの目線を重視した見方が成功した例ではないかと考える。

先ほども沼田城建設の賛否のお話があったが、これは観光をどういう方向に進めていくのかということだと思う。お金を落としてもらいたいのか、それとも沼田市の高度な文化を発信したいのか、ここがはっきりしないと難しいと思う。おそらく本音は出来れば両方を考えてのことかと思う。

しかし市外からお客様を呼べることと高度な文化ということは必ずしもイコールではなく、レベルの高い文化が理解されればそれが最良だが、一般大衆が来たいと思うということであれば、必ずしもレベルの高い文化である必要はないように思う。

要するに観光の目的を、沼田市の文化の発信をメインにするのか、それとも経済的な効果を重視するののかというところを考えていく必要があることだと思う。

それから外から人を呼びたいのであれば、呼ぶ対象者を絞り込む必要があるように思う。その為にも、実際に来てくれた人たちから情報を取るという方法が有効であると思っている。

<委員>

先ほどインバウンド推進のところ、沼田市では台湾、タイ、ドイツを中心にイ

ンバウンドを進めたいという説明があったが、理由は何か。

<事務局>

台湾につきましては、台湾で紅茶栽培を指導した方が利根町の出身で、台湾の方から見ると台湾紅茶の祖と言われていることから頻繁に交流を行っております。

タイにつきましては、温泉の利活用についてタイから県知事等が沼田市、みなかみ町にいらしたことがご縁で交流を進めている経過があります。

<委員>

先ほどのご意見にもあったが、交流自体は悪いことではないが、交流を進めようとする国の方々が何を求めているのか、まずはそれを把握しておかないと、こちらから訪問して働きかけても相手には来てもらえない場合もあるのではないかと。

<委員>

以前もアドバイザーの篠田先生から沼田市には外から来られる方たちへの親切な案内表示の「看板」が少ないとお話があったが、沼田インターチェンジを降りても現状では道路標識しかなくて、市外からおいでになった方は興味ある場所や施設がどこにあるのかもわからず、どう行けばよいのか分からない状況であるので、せめてインターチェンジの出口にはシンプルなもので構わないので案内看板を設置してはどうか。

また、以前の会議で「望郷の湯」の話があったが、望郷の湯ではどこに何があるのかを示した看板がない。こうした事がないように施設内容やその位置がよく分かる案内看板を設置してはどうかと思う。

<委員>

群馬県の屋外広告条例などの関係もあって、場所によっては思うように看板やのぼり旗の設置ができない事情もある。

<委員>

分かりやすい看板が設置されているだけで、来訪者の市に対する印象が大きく変わってくると思われる。

<アドバイザー>

いわゆる都市計画上の「サイン計画」ということになりますが、サイン計画に取り組もうとすると、問題になるのは、この沼田市では、何を売り、何をしようとしているのかという事が明確になる議論をしっかりとっておかないと、サインそのものがしっかりしてこない事になります。

例えば、沼田市では観光に特化したサインにすることが決まれば、周辺地域も含めて全市的に方向性がはっきりしてくると思います。皆様のご意見を拝聴していますと、多分それはこの市民構想会議の重要なテーマのひとつとして議論を

深めなければならない問題になるのではないかと思います。

それからサイン計画の中で重要なものは、沼田のまちの「色」を決めなければいけないということが出てくると思います。例えば緑色ならば緑で構いませんが、長野県の檜川村でサイン計画が進められた際には、この地域が漆碗の生産が盛んであったことから、漆の下地塗りの色からモスグリーンをイメージカラーとしてそれを村のすべてに関連付けて、それを売りにするサイン計画が進められました。

おそらくこの市民構想会議での議論を進めていくと、そのような話になってくるのではないかと思います。

先ほどのご意見の中で出ていた天空の城下町について、未知のお話なので教えていただけませんか。兵庫県の「天空の城、竹田城」でなく、そうした「天空の城下町」という呼称が、ここにはあるのですか？

<委 員>

河岸段丘に霧が立ち込めて、台地の上だけが浮かび上がって見える風景から来ている表現です。

<委 員>

大河ドラマと関連してテレビ番組で沼田市が取り上げられていたが、市民の記憶には残っていても全国的には忘れられていると思うので、過去の番組を基に集客することは、これからは難しいと考えている。

<会 長>

来年度の提言書作成の際には、観光とサイン計画ということが、この市民構想会議の重要なテーマになってくると考えられるので、委員の皆さんにも各分野からお考えいただいて、来年、十分に協議できればと考えているのでよろしくお願いしたい。他にご意見があればお願いしたい。

<委 員>

27頁のフェンシング教室の開催で年1回を目標としているが、平成26年度から毎年20回開催している。これは現状で年間20回開催しているフェンシング教室を年1回に減らしたいという目標設定なのか説明いただきたい。

<事 務 局>

目標値設定の考え方を所管課に確認して、次回の会議で回答させていただきたいと思います。

<会 長>

他にご意見がなければ、次の目標3「若い世代の結婚出産子育ての希望をかなえる」に進めさせていただく。

<事務局>

補足説明になりますが、35頁の合計特殊出生率の平成28年度実績が未公表となっていますが、群馬県人口動態統計概況の確定値が1.50人と公表されましたのでご報告申し上げます。

<委員>

出産育児一時金は国保加入者のみ対象になっているのかお聞きしたい。

<市民部長>

各医療保険者がすべて行っていますので、国保加入者は国保ということで沼田市が保険者になっている立場から出しているというものですから、他の医療保険であれば、例えば組合健保ですとか、そちらの方はまったく同額が支給される仕組みになっていますので、出産された場合にはすべて共通する仕組みになっています。

<委員>

市に子どもをたくさん産んでくださいという考えがあるならば、出産育児一時金と同じように保険に関係なく奨励金を出していく仕組みがあってもよいと考えるがどうか。

<健康福祉部長>

出産育児一時金とは別に出産奨励金を創設してはどうかというご意見だと思いますが、色々な考え方、様々な支援策があると思いますので、そうしたご意見をお聞かせいただきながら今後の取り組み等について検討を進めてまいりたいと考えております。

<委員>

33頁の空き家対策のところ、平成26年度が0人、平成27年度が3人、平成28年度が52人となっているが、利用者の主な世代とお住いの場所について教えていただきたい。

<事務局>

移住促進トライアルハウスにつきましては、実際に移住をご検討いただける方を対象としておりまして、利用者の年齢やお住まいも様々でございます。また、ご好評をいただいております、より多くの方にご利用いただきたいことから、現在は当初よりも利用期間を短縮して対応している状況でございます。

<委員>

このトライアルハウスの利用者で実際に移住した人はいるのか。

<事務局>

詳しくは観光交流課に確認しないと分かりませんが、このトライアルハウスを

ご利用されて、移住を予定している方がいらっしゃるとの話は聞いております。

<委 員>

若い世代に移住してきてもらえば、目標3のKPIである合計特殊出生率も上がってくるのか。

<事務局>

合計特殊出生率は一人の方が一生に何人の子供を産むのかという指標でありますので、若い世代の方やこれから出産をされる方が移住されて来れば上がる可能性はあろうかと思えます。

<委 員>

以前の会議の中で人口減少を抑制するための努力が必要との意見を出させていただいたが、ここで努力していけば、ある程度は人口減少を抑止できると思うが、市としてはどう考えているのか。

<事務局>

移住に関しては人口減少に関して有効な手段であると思えますが、沼田市の人口で考えた時に年間で500人程度減少しているという事実がありますので、それに対して年間の移住者が1～2件ということでございますので、それが結果としてどのように現れるのかということは判断が難しいところもあるかと思えます。

ただし、市町村の姿勢として人口減少を黙認していて良いのかということもありますから、現在はあらゆる手段を使って少しでも人口減少を抑制したいという考えから、こうした移住施策などに力を入れているということだと思えます。

<委 員>

新潟県糸魚川市でも空き家等の人口減少対策を行っていて、担当係には女性3人が配置されていて、移住家族の奥様をサポートするということをやっている。また、学校の同窓会などを市から助成して市内で実施して、その結果としてふるさとに帰ってくる方が増えたとのことなので、少し視点を変えてそうした施策の実施についてもご検討いただきたいと考えている。

<委 員>

29頁に移住コンシェルジュの配置というKPIがあるが、3年間で0人との実績になっている理由は何か。

<事務局>

移住となると様々な支援が必要となりますので、移住コンシェルジュには様々な知識や経験、そして能力が求められることとなります。こうした人材の確保という難しさなどもあって、結果的に現段階では0人になっているものと考えられます。

<委 員>

もっとフレキシブル（柔軟）に考えて、糸魚川市の移住担当係に女性職員を配置して奥様方をサポートする考え方などは参考にすべきであるし、沼田市でもすぐにも対応できると思うので見倣ってはどうか。

<会 長>

前後しても構わないので、他にご意見がなければ目標4の「時代にあった地域をつくり、安心な暮らしを守るとともに、地域と地域を連携する」についてご意見をいただきたい。

<委 員>

目標4の数値目標である中心市街地歩行者通行量増加について、この数値はどのように計測したのか。

<事 務 局>

これは交通量調査による数値であると思います。

<委 員>

あくまで中心市街地を活性化させようということが目的であり、単純に通り過ぎた人が多ければ良いということにはならないので、この数値は何を目的として、何をしようとしているのかが分からない。

<事 務 局>

先ほどもご説明申し上げましたが、この数値は交通量調査により計測したものであり、中心市街地の活性化と歩行者数の増加は比例関係にあるという考え方に基づくものであると思われます。

<委 員>

この交通量調査は年間2回、下之町と上之町の交差点の2か所で実施しており、歩行者や自転車、自動車の動きを計測し、国や県にその結果を報告しているものである。

<委 員>

私がお聞きしたいのは、この数値がどのように中心市街地の活性化につながっていくのかを知りたいということで、どのようになれば活性化したということになるのかが分からない。

<委 員>

中心市街地が整備されていく中で、人や自動車の動きにどのような変化があるのかを見るためのもので下之町にグリーンベル21ができた時にはどのような変化があったのか、また、上之町の整備が行われた時にはどのような変化があったのかなどを把握し、その結果を国や県に報告しているものである。

<委 員>

今は、折角ビックデータが公開されているので、それを利用した方が時代にあっているように感じられるがどうか。

<委 員>

国や県に報告するために継続的に交通量調査を行っているものであり、今後も継続して調査を実施していく必要があると考えている。

<委 員>

子どもや高齢者に関して近所で助け合う意識を常に市からアピールすることによって、市民にそうした意識が醸成されてくると考えているがどうか。

<会 長>

お互いさまのまちづくりが始まっていると思うが、どのように進められているのか説明いただきたい。

<健康福祉部長>

平成28年度から中学校区を単位としてお互いさまのまちづくりということで在宅介護支援センターの方をコーディネーターとして勉強会を実施しています。

現時点では高齢者の方が議論の中心になっていますが、高齢者に加えて障害者であるとか、お子さんなどもという議論もあります。また、失われつつある地域の雰囲気をお互いにまちづくりの中で考えていけないかということで、現時点ではあくまで勉強会ですが取り組みを行っています。

最小単位となる町という単位で高齢者の見守りも含めた取り組みができればということで進めているところでありますが、その中でご意見にありましたスローガンのところでPRしていくということについても今後検討させていただきたい。

<委 員>

区長会にも市から見守り隊を組織してくれとの依頼があったが、小規模の町では人が足りなくて組織できない、また、住民の過半数が65歳以上の高齢者という状況では誰が誰を守るのかという問題もある。加えて個人情報保護の問題もあって誰がどこに住んでいるのかを区長が把握できていない状況で、行政から見守り隊を組織しろと依頼されても組織化は困難であるといわざるを得ない。

<委 員>

私の意見は、町などの具体的な組織で取り組むということではなくて、まずはスローガンを市民に浸透させて、助け合いの意識を持った人を増やすということである。

<委 員>

現在でも立派なスローガンはあるが、各町で取り組みを進めるにあたってはあま

り意味がないように感じているので、町単位で取り組みを進めるのであれば住民の個人情報情報を市から区長に提供してもらえないと区長会としては何もできない。

<委 員>

無理に町単位で取り組まなくとも、個々の意識を高めることで、将来的には変化が起きてくると思うがどうか。

<健康福祉部長>

スローガンの話とは異なりますが、70歳以上の一人暮らしの方に老人クラブ連合会にお世話になって、年間45人位の方に、一人暮らし高齢者の見守りということで行っている事業がございますので紹介させていただきます。

<会 長>

災害時の一人暮らしの対応で、調査の時には情報を公開しても良いか同意書を得てやっているのです、そうした個人情報は民生委員さんが一番ご存知だと考えられる。

<委 員>

老人クラブの本質は健康、友愛、奉仕であり、会員相互ではある程度交流があっ
てお互いの状況も把握しているが、現在の老人クラブの加入率は約10%であり、
それ以外の90%については、ほとんどわからないというのが実態である。

<委 員>

47～48頁の関連事業で、仮)介護予防推進事業は平成29年度以降も実施する
予定があるか、また、介護予防スタジオや交流サロンの運営にあたってはどのよ
うな方がスタッフになるのか教えていただきたい。

<健康福祉部長>

高齢福祉課で筋トレなどの介護予防のプログラムづくりに携わっております。
そして地区や家庭で取り組む際の介護予防のサポーターには地域の方に入っていた
だいて認定しているところでございます。そういったところで養成講座なりにご参
加いただいて、サポーターとして事業の方に参加いただいているのが現在やってい
るものです。これを介護予防スタジオであるとかサロンの中にこの時点では計画さ
れておりましたので、この部分で記述をしているものでございます。

<委 員>

平成29年度以降も実施予定はあるのか。

<健康福祉部長>

事業としては引き続き継続して実施しています。

<委 員>

49頁の施設利用者18万人は真田丸展の入場者によるものか。

<事務局>

お考えのとおりでございます。

<会長>

予定の時間を過ぎていますので、全体をとおしてご意見がればお願いしたい。
特にご意見がなければ、アドバイザーの篠田先生からご意見、感想などをお聞かせ
いただきたい。

***** <略> *****